

としており、そのために英国で成功したサッチャーイズムの是正を参考に、現政権政党に比べてより過激な主張をしていく覚悟が必要であろう。難しい課題だが、そうであるがゆえに挑戦したい。と、熱意を込めて締めくくられた。

通常のシンポジウムやセミナーの平均年齢よりは若干高めの雰囲気ではあったが、会場を埋める参加者の

熱気が伝わってきたシンポジウムであった。近藤次郎氏の「有限な資源のもとで、個々の効用を最大化しよう」との挨拶で始まった夕刻の懇親会でも、学会誌1号は実は関西で発行されていたとの新事実の紹介等、興味の尽きないエピソードが紹介され、和気藹々の雰囲気の中、40周年記念シンポジウムの幕は閉じた。

創立40周年への祝電

6月2日開催の記念式典において、総合司会 山田郁夫氏（日本OR学会副会長）から文部大臣をはじめ、IFORS会長 Peter Bell氏他、各国OR学会会長などからの祝電が披露された。

ここにIFORS会長とSecretaryからの祝電（一部省略）とその他の方々のお名前を掲載させて頂き、感謝の意を表わすことといたしたい。

1. Peter C. Bell (カナダ IFORS 会長)

On behalf of IFORS, I would like to extend sincere congratulations to ORSJ on the occasion of its 40th anniversary. ORSJ has been a distinguished and active member of IFORS, and many individual members of ORSJ have played important leadership roles within the international OR community. The 1975 IFORS triennial conference held in two different cities (Tokyo and Kyoto), is remembered fondly by those who attended.

The last 40 years has been a time of great change in OR. From the optimism of the early years, followed by a period of self doubt, OR is now emerging into a bright future. Globalization and competition foster the need for what OR has to offer, and IFORS and ORSJ are well positioned for an exciting future. ……中略……

We look forward to the next 40 years of achievement in operations research from ORSJ and its members, and continuing cooperation between IFORS and ORSJ in developing OR around the world.

2. Helle R. Welling (デンマーク IFORS Secretary)

(前略)

One of my first exposures to the IFORS world took place in Japan in 1973 when I visited there together with the then IFORS President, Professor Arne Jensen, and my predecessor as IFORS Secretary, Mrs. Margaret Kinnard. I recall the warm reception and welcome by representatives of the ORSJ community and by the ORSJ staff at the Gakkai Center Building.

I returned to Japan in 1975 for the IFORS Conference.

It took place in two locations, Tokyo and Kyoto. Today, when I am fully aware of all the details involved in organising such an event, I can only say I don't know how the organising Committee managed all the logistics involved in relocating the Conference …… 2 days in Tokyo and 2 days in Kyoto!!

1975 and Japan was also the official start of my IFORS career since I was appointed IFORS Secretary at the 1975 General Meeting in Kyoto. Throughout all these years I have been enjoying a smooth and



extremely pleasant working relationship with the ORSJ Officers and the ORSJ Secretariat staff. I express thanks for that and I ask the ORSJ and all its members to accept my very best wishes for the next 40 years.

3. Xiang-Sun ZHANG (中国 OR 学会会長), Japhet S. Law (香港 OR 学会会長), Arthur Geoffrion (アメリカ OR 学会 INFORMS 会長), Saul I. Gass (IFORS, INFORMS 副会長), Jesus T. Pastor Cinrana (スペイン OR 学会会長), 小杉隆 (文部大臣)・石橋信夫 (大和ハウス工業(株)代表取締役相談役), 松原治 (株紀伊国屋書店代表取締役社長).

創立40周年記念セミナー

『ORの新潮流 — ORはどう役に立つ —』ルポ

相澤 健実 (秩父小野田(株))

OR学会の創立40周年を記念して『ORの新潮流 — ORはどう役に立つ —』と題したセミナーが平成9年6月3日、40周年記念事業実行委員会と研究普及委員会の共同企画で開催されました。会場は東京ガス(株)の御好意により、JR浜松町駅直近で芝離宮の緑を一望できる同社本社13階会議室で、参加者は正会員31、賛助会員3、学生12、非会員1の総勢52名で行われました。このセミナーの狙いは、ORの各分野の第一線で活躍されている研究者から、企業の実務担当者や研究者に対し最近新しく研究が進展し、今後の幅広い適用が期待されるテーマのエッセンスをオムニバス形式で紹介・解説してもらうことにありました。

冒頭、文教大学の真鍋先生から、「今回のように、経路の違った分野の最近の話題を1日で集中して聞けるのは、企業の人だけでなく大学のメンバーにとっても非常に貴重な機会だ」との開会挨拶があり、各講演に移りました。以下、各先生の講演と質疑の要点をかつまんでご紹介します。

1. 『数理計画法 — 連続構造の中に離散構造を見える —』平林隆一先生 (東京理科大学)

始めに、「数学は1つであり、代数学を始めとして、様々な研究分野が深いところで繋がっている。これと同様に数理計画も1つであり、線形計画問題、整数計画問題、組合せ最適化問題、非線形計画問題、パラメトリック非線形計画問題、……等々が深いところで繋がっており、そのキーワードは凸多面体である。」と

の基調の話がありました。続いて数理計画法の歴史を概説され、安定集合問題の定式化(組合せ最適化問題)の話が続き、非線形計画法と離散構造をテーマとして、KKT—集合、 Σ の滑層分解、ラグランジュ多面体の話が、また、半順序集合と単体的複体をテーマとして、単体的複体と上限予想、順序複体とシェリング可能性、等の各論が展開されました。

全体を概括すれば、近年、離散凸解析のような、離散構造と連続構造の類似性の重要性が指摘されている中で、非線形計画問題のように本質的に連続構造をもっているようなものも、さらに深く探れば凸多面体論や有向マトロイドのような離散構造を持っている。問題の構造を考えるとという立場でいえば、数理計画というのは離散構造で統一されているのだという内容でした。ボリューム的には2日間ほどの講義が必要と思われる内容を、コンパクトに系統立てて、しかも非常に理解しやすく解説していただきました。

質疑では、非線形計画問題をパラメトリックに追いかける場合マルチパラメータではどうなるのか。グラフ理論で非線形問題に最終的に行き着けるのか、等の議論が打ち解けた雰囲気のもとでなされました。

2. 『投票による決定において投票者の影響力をどう測る? — 協力ゲーム理論とパワー指数による分析 —』武藤滋夫先生 (東京都立大学)

冒頭、「ゲームの理論には、いわゆる協力ゲームと非協力ゲームとがあるが、それが両立しているケース